

<研究報告>

国頭村奥むらの戦争体験（1）

宮城能彦

要約

本稿は沖縄県国頭村奥集落の人々の戦争体験の聞き取り調査（第一回）の記録である。沖縄本島北部地域において激しい戦闘が行われることはなかった。しかし、沖縄戦中住民は山へ避難し、警防団を組織して米軍の動きを監視しつつ厳しい生活を強いられていた。奥出身者の戦争体験は、奥において戦争を経験した方だけでなく、伊江島へ徴用された人、徴兵され大陸や南方へ兵士あるいは軍属として行った人、関西の工場へ動員された人など様々である

キーワード：沖縄戦、オーラルヒストリー、国頭村奥、警防団、徴用

はじめに

本稿は、沖縄県国頭村奥集落の人々の戦争体験の聞き取り調査（第一回）の記録である。沖縄本島北部地域において激しい戦闘が行われることはなかった。しかし、沖縄戦中住民は山へ避難し、警防団を組織して米軍の動きを監視しつつ厳しい生活を強いられていた。また、奥在住、または奥出身者には、奥において戦争を経験した方だけでなく、伊江島へ徴用された人、徴兵され大陸や南方へ兵士あるいは軍属として行った人、関西の工場へ動員された人など様々である。それらの経験をオーラルヒストリーの手法によって記録することの意義は大きいと考えられる。

聞き取りは、2010年6月19日の午後と20日の午前国頭村奥の奥民族資料館にて、筆者および元奥区長で「奥のあゆみ」を編纂した島田隆久氏が質問するという形式で、記録はボイスレコーダーによる録音およびビデオ撮影によって行った。

テープ起こはおよび編集は宮城が行い、地名や人名の表記については島田氏に見てもらった。なお、インタビューはその後、2011年2月11日と3月12日にも行った。

1. 八幡製鉄所からニューギニア戦線へ

宮城昌一（大正6年11月10日生）

（宮城昌一氏経歴）

- 昭和 7年 奥高等小学校卒業
- 8年 学校小遣いとして働く
- 8年 共同店で小僧として働く
- 9年 共同店退職
- 10年 郵便局員
- 12年 支那事変
- 13年 徴兵検査（20歳）

- 14年 八幡製鉄所勤務
- 4月 招集、北支那へ
- 15年 北支那より帰還
- 16年 1月 小倉陸軍造兵廠（ぞうへいしょう）※武器・弾薬などの設計・製造・修理などを行う軍隊直属の工場
- 17年 5月 陸軍輸送司令部
- 18年 第49碇泊場司令部 マレー半島へ
- 19年 パラオを経てニューギニアへ
- 20年 ニューギニア島にて8月15日終戦
12月10日ニューギニアより帰る。広島へ入港
- 21年 柳井国立病院（国立療養所）入院
- 22年 マラリア治療
- 25年 沖縄へ帰る

—— こんにちは、今日は暑い中ありがとうございます。この前は共同売店のお話を聞かせてくださりありがとうございます。今日は戦争体験のお話ということでよろしくお願ひします。宮城さんは奥で生まれ育って、奥で学校をでられたのですよね。初めて奥から出たのはいつですか？昭和7年に高等小学校を卒業なされて・・・

卒業してから小学校で小遣いしておりました。その後、共同売店で4番バッターの小僧として働いた後、奥郵便局で勤めました。

昭和12年に支那事変が勃発しましたが、その翌年徴兵検査。体が小さくて乙合格だったので、すぐには徴兵されず、八幡製鉄所で働いていました。一年くらい。

—— 八幡製鉄ではどんな仕事をなさっていたのですか？

一年くらいおりましたかな。あまり期間は覚えていませんが、ベルトコンベアで仕事していました。体が小さくて重労働に慣れていないので大変でした。あまりにもきついで逃げようかなと思っていて矢先に徴兵されて支那に行ったのです。

—— 招集されて最初はどちらへ？

宮崎の都城。23連帯。半年くらい訓練を受けてから北支に行きました。そこで一年少しいた後、日本本土に帰りました。

小倉に戻って約一年過ごし、また陸軍輸送司令部に入って、18年にマレー半島。第49碇泊場司令部（※陸軍船舶司令部船舶輸送司令官隷下）というのがあったのです。パラオに行ってからニューギニアに行きました。向こうでは、2～3個師団くらいいました。15万人くらいいたそうです。

私は、やられた船を修理する碇泊場司令部に3か年くらいおりました。日本は飛行機もなく爆撃されるままで、食料もありませんでした。ニューギニアには道がなく、食料を届けるには船しかないのです。しかし、アメリカの爆撃でやられてばかりです。食料を運搬できないので、各地で食料不足でしたが、運べないのであるところにはあるのです。私はマダンの集積所にいて、軍人ではなく軍属でした。

当時は事務員とか旋盤とか軍属も多かったです。占領したらすぐその土地の工場を接収して現地の人を使って船の修理をさせたり部品をつくっていましたが、その仕事を私はしていまし

た。戦闘で壊された船や機械の修理の仕事をする軍属です。

しかし、日本はボコンボコンやられてばかりだし、第一線の兵隊たちもほとんどが餓死で死んでいきました。ほとんどの兵隊がマラリアにやられていましたね。食料もないし。そんな状況の中で、3年間ニューギニアの山の中にいました。

そして、3年後にやっと船が迎えに来ました。自分では元気だと思っているのですが、体力がなく、船に乗るための階段を登りきれないのです。船員が背中を押してくれて、ようやく船に乗れたのです。骨と皮でしたから。

—— ニューギニアの山の中では何を食べておられたのですか？

「食べられる葉っぱを探して食べたり。兵隊は鉄砲を持っていたからイノシシや鳥を撃ってました。とにかく、なんでも食べて生き延びていました。ニューギニアにはサゴヤシがあって、それからでんぷんをとって食料にしてました。決して美味しいものではなかったのですが、それしかなかったのですよ。

そのサゴヤシがあるところを求めて、各部隊とも次の部落へと移動していました。もういさどころではない。各部隊とも命を繋ぐためだけに移動していました。

サゴヤシのでんぷんはおいしくないで、小さなビンに塩とか入れてそれをかけて食べていました。粉味噌があったらいい方で、精鋭部隊が海岸で塩を炊き出して各部隊に配給していました。戦闘をしながらですよ。戦闘部隊の食料も確保しなくてはいけないので。人間とはそういうものでしたよ。

マラリアでも戦闘でもたくさん亡くなりましたよ。悲惨なものでした。15万人くらいいたのが、1万5千くらいになったと聞いています。

帰りの船の中では、お粥だけでした。いきなり甘いものあげたら死んでしまうということで、お粥だけでした。本土に変えると寒くて寒くて、火もないので、それで死んでしまった人もいました。

—— 引き上げたのが、昭和20年ですか？

はいそうです。ニューギニアは一番早く帰れるように政府が手配してくれたようです。最初は広島島の柳井に上陸しました。バラック小屋だったので寒くて、暖房もなく、ガタガタ震えて大変でしたよ、みんな。

（※柳井は山口県。近隣の広島県大竹市に「大竹引揚援護局」があり、ニューギニアからの引揚者も多く受け入れているので上陸は大竹の可能性もある。編者注）

—— ニューギニアの島の人との交流はあったのですか。

そうですね。うまく島の人をだましてというか。

船でセブク川という大きな川を上って、島の人が住んでいるところに行って、食料をもらったりするのです。兵隊の中にはすぐにピジン語を覚える人がいて、「君たちと僕たちは兄弟だ。悪いアメリカを追い出すために一緒に戦おう」と言ってすぐに仲良くなっているのもいました。向こうは魚もあるし野菜もあるし、とてもよかったです。

—— ニューギニアの人は日本軍に対して協力的だったのですか？

日本語を習うのですよ。日本の兵隊から。逆に私たちが現地の言葉を習ったりして、とてもいい関係でした。

—— 先にアメリカ兵が入っていて、すでに反日の宣撫工作がなされていたということはなかったのですか？

そういうことはなかったです。僕らのところではなかったです。

でも、アメリカはアメリカで、日本軍に協力したらひどい目に合うというような宣伝をしていました。日本は日本で、宣伝合戦でした。

—— 12月に広島まで戻って。それからはどうなされていたのですか？

「私はマラリアに罹っていることもあっていることもあって、入院生活が長かったのですが、その後は、長崎に親戚がいたので軍艦島というところにいました。それから、大阪におじがいたので、それを頼っていきました。

—— 同じ部隊に沖縄の人はいませんでしたか？

いました。何人が帰ってきたのですが、いや、ニューギニアではいませんでした。支那ではいました。最初に召集された人たち600名くらいおりましたかね。3か所に分かれていました。

あ、同じ奥出身の島袋栄寛がいました。部隊は別でした。彼らはニューギニアの山を越えて反対側の方に撤退したようですね。戦後2度奥に戻ってきて少し話したくらいですが、ニューギニアの山は高いから、寒くて凍死した兵隊も多かったそうですよ。

—— ニューギニアで最も苦勞したことはなんですか？

いやあ、苦勞だけです。ただ、セビク川にいる時、現地の人から言葉を教えてもらったり日本のことを教えたりしている時は楽しかったです。日本兵も軍属もごっちゃでした。彼らがイノシシの肉や魚やバナナやスイカ持って来たりしてくれましたから。

—— そういうお話は、これまであまりなされてないですか？

全然したことないです。

2. 伊江島徴用—飛行場建設作業—

知花フミ（大正14年2月9日生） 宮城シズ（大正8年4月8日生） 宮城節子（大正8年10月22日生）

—— 伊江島で作業なされたんですか？伊江島はとても大変だと聞いておりますが。

はい、飛行場づくり、モッコ担いで。今考えるととってもおかしくて。もう大変でしたよ。運が良かったから生きて帰ってこれたんですよ。あそこで、10・10空襲にもあって。

—— 伊江島に行かれたのは、幾つの時ですか？

もう3人とも二十歳も過ぎていました。二人は25歳。学校は卒業していましたが、まだ結婚してませんでした。みんなで本部まで歩いて行きました。役場の人が入引率していたと思います。役場から命令が来ていました。一日で行きました。本部から軍の舟艇に乗って。奥からは二手に分かれて、男の人もしっかり行きましたが、今残っているのは私たち3人だけです。暑くも寒くもなかったから秋ごろですね。昭和19年の。

作業はモッコ。自分たちで耕して、二人でモッコに入れて運んで。飛行場の周囲に穴掘っていました。

10・10空襲の時は、私たちは朝ごはん食べている時だったから助かりました。ご飯は穴の中

で食べていたから。

焼夷弾がたくさん落ちて、布切れがヒラヒラしてました。みんな逃げ惑って空壕に隠れてました。立派に掘ってある防空壕でした。頑丈にできていて、きれいにしていました。

たくさんの人がそこに隠れました。だけど、そこも危ないということになって、海岸の（自然）洞窟に兵隊も一緒にみんな隠れました。そこには女の人が兵隊と抱き合って隠れていました。慰安婦というものだったんでしょうね。

伊江島では朝は顔を洗う水もなくて。そのまま現場に行っていました。空襲が来るまでは小屋があって小屋で寝泊まりしてました。

当時、伊江島には、向こう岸にいる人の顔が見えないくらい広い池があって、そこで顔洗ったりしてましたが、そこでは、牛を浴びせたり、人間が足を洗ったり、芋を洗ったりしていて、よくもまあ病気にならなかったものだと思います。銀蠅がブーブーしてたくさん飛んでいました。

—— 病気になった人もやはりたくさんいたんでしょうね。

誰も病気にならずにみんな無事に奥に帰ってきましたよ。舟艇で本部まで連れて行ってもらって、そこから名護を通って帰りました。10月の空襲のあとは作業がなくて。

—— 空襲の後解散になったのですか？

いや、係りの人が、国頭の人は帰ってもいいと言われました。国頭村の人は現場でよく働くといつてとても人気があったんですよ。軍から。だから、国頭と言えなんでも優先的にしてもらえました。だから早く帰れたのです。裸足なのにあんな長い道よく帰って来れたなあ。

（島田）国頭の総監督はだれでしたか？みよこさんのお父さん？はがんじ？もりお先生の奥さんのお父さんですね。

みよこさんのお父さん。鏡地の。戦争になってから、「みんな待っていなさい。私が最初に入るから」と言って、あの方が最初にお墓の中に入って、その後「みんな入りなさい」と言って。一週間くらい入って隠れていましたお墓に。食べるものないから、食料はうーじ（砂糖キビ）でした。だけど、切れ端しかなくて、みんなこれしかないから。

—— 10・10空襲ではケガしたり亡くなった人もいたんですか？

亡くなった人もいたでしょうね。見てはいないけど。ケガした人は見ました。大宜味の人だったけど、大けがしてかわいそうだった。みんな逃げたけど、壕のなかに一人だけ残っていました。ケガして歩けないから。

帰るときは、郵便局から奥の郵便局に電話して、「みんな無事ですすよー、無事で帰るからよー。」って。

ちよが郵便局にいたからね。車に辺土名まで乗せてもらって、辺土名で泊まって、辺土名にシーちゃんがおったから。

小学校の先生に会いました。与座先生。

—— 奥も10・10空襲の被害うけてますよね。

（島田）一人死んでますね。

奥ではまた石部隊に使われて。木炭運搬。伊江島から帰ってきたらすぐ。奥の人たちは炭焼きしておったよね。山から浜まで運びました。でも空襲で船も焼かれて、木炭（小屋）も焼かれて。

その後、みんな山に逃げて。みんなバラバラに。

（島田）浜には倉庫があったから。辺戸岬に米軍の陣地ができたから、ある程度のグループを作って山に逃げた。

若い女はどうするこうすると危ないからと言って、こんな大きな着物を着けて、髪もバサバサにして、カッコ悪くして。山から下りて行ったよ。洪水で川を渡ることができないからピー（樋）を渡って。ピーから降りたら、辺戸のしたにあるうざばらまで歩いて、その後米軍の車に乗せられて辺土名に連れて行かれたさ。

3. 伊丹鉄工所徴用

宮城ナツ（昭和4年10月10日生）

（島田）ナツさんは高等科を卒業して、国の命令、役場の命令で女性が4名割り当てされて、軍事工場に行った人の一人です。あとの3名はだれですか？

今の姓でいいですか。宮城百合子、金城タツエ、恵美子、旧制は平良だけど今はわからない。尋常高等小学校を卒業した、7月に行ったんですよ。それまでも、防空壕ばかり掘っていました。最初那覇に行って、そこで一週間訓練を受けてから船に乗っていきました。ちょうど明日船が出るという時にサイパン島の玉砕という（ニュースの）紙が張り出されていたんですよ。あんな最中に行ったんですよ。

那覇から船に乗って鹿児島まで。鹿児島には会社が迎えに来ていました。

私たちが行ったのは、兵庫県の伊丹、伊丹鉄工所というところでした。鹿児島から夜行列車に乗って、昔の記者は煙がすごくて、トンネル出たら顔真っ黒にして、笑いながら行きました。鐘ヶ淵という所だったんだけど、鐘ヶ淵機械工業株式会社というところでした。行った翌日から一週間だけ昼勤していましたが、2週目からは一週間交代の夜勤でした。二交代して夜勤して。泣いた時もありました。

— どういう作業だったんですか？

こんな大きな旋盤というものをもちまされて、あれで、飛行機の部品とかいうもの、管みたいなものを作ったのですが。まだ、体が小さいから高い台に立って旋盤を使っていました。

— それは、工場に行ってから初めてやり方を教わったのですか？

「はい、バイドという材料を切るものがあつたけど、よくそれを折ってしまつて怒られました。最初の頃は要領もわからなくて。よく折って叱られました。金屑で手も切つて、どこもかも。ケガもよくしよつたですよ。金屑で。鉄をこうやってつくるものだから。

— 四人とも一緒に同じ工場ですか？

はい、同じ工場で。各学校から300名ほど一緒に行きましたけどね、沖縄から。うちの学校からは4名。各学校に割り当てられてました。卒業する前に誰々に行くことになっていると言われました。奥から4人。奥尋常高等小学校から。

— 女の人だけですか？どうやって選ばれたのですか？

はい、女の人だけ。先生が選びました。それはもちろん親とも相談していましたがね。

当然、給料はありましたよ。いくらかは忘れたけど、6という数字がありました。60円なのか、6円だったのか・・・とにかく6という数字を覚えています。一応、給料はもらえました。

夕方の8時から翌朝の8時まで、夜勤の場合は、2週間目は交代して昼勤一週間して、また夜勤。12時間ほとんど立ちっぱなし。機械は休む暇なくて。いくさ勝つために。あはは、負けたけど。

— 途中で、ニープイ（居眠り）したりしませんでしたか？

いや、そんな暇はないですよ。ベルトはガチャガチャ回っているし。機械はずっと動いているし、ニープイしたら自分が怪我しますから。

— 7月に行って、それからどれくらいいらっしやったのですか？

そのまま終戦までいました。

終戦後も同じ工場で一年ほど仕事していました。その後引揚命令が出たので、引き上げて（沖縄に）帰ってきました。

終戦後は、雑用というか、終戦前にやっていた仕事とは違っていました。2年いたことになりません。昭和19年の7月に行って、二回お正月をしました向こうで。それで、何月だったかね、帰ってきたのは。

収容所に着くために白い粉、DDTを撒かれてね。

— 工場は空襲の被害はなかったのですか？

空襲はありましたよ。工場は焼けなかったけど、焼夷弾、爆弾を落とされました。宿舎も工場の敷地内にありましたが、宿舎も大丈夫でした。

飛行場があるでしょう。伊丹に。その関係でなのか、空襲が激しかった。夜はもう、空襲があった時は、稲川という川がありましたが、川に避難しよったです。

— 防空壕ではなくて、川に。

「はい、川に。防空壕に入ったのは奥にいる時、生徒の時だけです。防空演習はよくやりましたけど。

— 沖縄に帰りたくてしょうがなかった？

「沖縄に帰りたかったけど、だけど、親も（生存して）いるかどうかわからないし、情報も何にも入らないから。とにかく、引揚命令がでたから、引揚船に乗せられて帰ってきて。帰ってきたら・・・。

— 沖縄は玉砕したという風に言われて・・・

そうそうそう、沖縄は玉砕したと言われました。本土の空襲もだんだん激しくなってね、沖縄がやられたからというニュースも入も聞きました。

原子爆弾が落とされた時など、白い服は下から着て、上から黒い服着なさいと言われたこともありました。原子爆弾は光の反射があるから。白い服着けていたら危ないから、白いのは下から着けて上から黒いの着なさいという命令もありましたよ（笑）。

— 引揚戦に乗るときは貰った給料とかはもってたのですか？

はい、沖縄の人には特別に、何だったかね、引き上げてくるときに何か特別にありましたよ。給料のほかにね。沖縄県人会からという話でした。工場からではなくて。そのお金は沖縄に引き上げて使えました。

呉までは汽車、呉の港から引揚戦にのって、中城湾につきました。

—— インヌミと言われるところですね。

はい。あっちに着いたら薬（DDT）をたくさん撒かれました。アメリカのコンセントに一泊か二泊して、「国頭の人はこの車に乗りなさい」という命令があつて、宜名真までその車に乗せられて、そこから山道を歩いて奥まで帰ってきました。

（島田）その時も4人は一緒ですか？

いや、百合子はいくさが終わった時に、「頼れる人がいる人はそこに行きなさい」と会社から言われておじさんのところに行きました。恵美子と二人だけ一緒に帰ってきました。タツエは親戚のところへ。いくさが終わったから、仕事もないから、頼れる親戚がいる人はそこに行きました。引揚船で帰ってきたのは恵美子さんと二人だけ。

昭和21年の11月じゃなかったかな、お正月前でした。

帰ってきたら家族はみんな元気でした。

—— 向こうで一番辛かったのは何ですか？

夜勤でしたね。教育もそのようにされているから。国のために働きなさいということですから。当たり前と思つていましたがね、それでも夜はきつかったですね、慣れるまでは。

それで、機会の部品が壊れた時に係りの人から怒られたり。殴られたりはしなかったですが、大きな声でよく怒鳴られたりしました。

—— 工場はみんな沖縄の人？

いや違います。内地の各県から学徒動員と言つて、女学校から来る人いるし、中学校から来る人いるし。大人も子どももみんな働かされて。

男の人たちはみんな兵隊に行くでしょう。だから女子供や歳いった人たちとか。あっちからもこっちからもよく来よつたですよ。学徒動員で。

—— ほかの県の人と友達になった知り合いになつたりはしませんでしたか？

しましたよ。いくさ終わつてからは、あちらで一緒に遊んだり写真撮つたりしましたよ。

—— 沖縄から来たからといって何か特別なことはありませんでしたか？

いえ、全然なかったです。みんな一緒。

4. 糸満から帰り奥の警防団へ

宮城親明（昭和2年8月27日生）

うちは防衛隊にも、護郷隊にも行けなかったんですよ。なぜならば、戦前から糸満にいたものだから。糸満で漁師していたんですよ。そしたら「いくさが来る来る」と親方さんが「戦争が終わるまでお家に帰っておいてください」と言つて帰しよつたんですよ。

（国頭に帰って来たら）そしたら、国頭には籍がないでしょう。現住所が糸満だから。だから、防衛隊にも護郷隊にも入れないわけ、名簿に名前がないから。そのおかげで今私は生きてるんだと思いますよ。

伊江島には一回行きました。9月に。糸満から戻ってきてすぐに伊江島に行って。その後糸満には帰れないでしょう。いくさだから。そのままこちら（奥）に留まったわけ。10.10空襲はこちら（奥）であいました。伊江島から戻ってきた時。

（島田）糸満から伊江島に行ったんですか？

いえ、私は、自分のたまし（役割）ではなくて、当時の（奥）部落の役員の誰かが行けなくて、その代わりに行ったんですよ。

—— 糸満に行かれたお幾つの時ですか？

16歳の時。それから3か年くらい。（戻ってきた時は）まだ3年経っていなかった。たいてい慶良間の阿嘉で潜っていました。すずるぐあーという餌になる魚を取るのが仕事で、その後は親方が釣りをするのを船で手伝っていました。あれはそんなには採れなかったなあ。ダイナマイトで採ったから。

奥に帰ってきて、伊江島に行って、また奥に帰ってきて空襲にあつて。その時はもう戦争が激しくて糸満には帰れなかった。部落の警防団というところに入ったんです。警防団には本部と支部がありましたが、うちらは本部詰めだったんですよ。警防団の仕事は、部落民を守る監視です。見回りとかするんですが、たくさんいました。奥だけで四、五十人いました。山に避難していたから、監視所で警防団が監視して。辺戸岬にアメリカの部隊がきていて、しょっちゅう奥に来るものだから、それを監視していました。アメリカさんが奥の部落に入ってきたら、あっちこっち駆け回ってみんなに連絡するんです。部落民を避難させるために。そういう役目でした。アメリカさんが帰ったら、解除なったようって呼び戻したり、そういうことをやっていました。

—— アメリカ兵はジープで来たんですか？

いや、徒歩で。車が通る道なかったから。舟艇にジープ載せて来たりもしよったですよ。舟艇から上陸して、ジープで山に入って行きよった。一号林道は全部ずっと山奥までアメリカさんが電話線を張ってました。道に向かって機関銃を備えておったんですよ。

いま考えたら命知らずだったんですよ。日本の手榴弾は安全ピンとっても叩かないとすぐは爆発しないでしょう。でもアメリカさんのは糸を引っ張ったらすぐ爆発するんです。木の股に手榴弾が掛けられているんですよ、アメリカさんが。アメリカさんは奥に泊ったりせず必ず辺戸岬に帰って行きよったんです。アメリカさんが帰ったら、うちらがその手榴弾を外して、奥川の川上に持って行って、そこには魚がいるから、魚を取りよったんですよ手榴弾で。食べるもの何もないから。今考えたら命知らずだったなあと思ってね（笑）。

—— アメリカの手榴弾は糸を引いたらすぐに爆発するって知っていたのですか？

わからないですよ。手榴弾には握るところがあるけど、それを外したら爆発するんですよ。アメリカさんのは、日本のと違って安全ピン抜いても、手を離さなければ爆発しないから。最初はわからないで。まず最初は失敗したわけですよ、糸引いて、投げたら爆発するものだから、

こういうモノなのだなあといって、次から扱えよったです。

—— アメリカ兵は何のために手榴弾を置いていったのでしょうか？

人を殺すためでしょう。やっぱり戦争だから。糸を引っ張ったらすぐに爆発するのだから。畏みたいなモノでしょうね。

—— 手榴弾が爆発する音を聞いてアメリカ兵がまたやって来るということはなかったのですか？

いえ、夜だから。来るのは昼だけです。夜は来ない。山を降りるときは、信夫さんのお父さんが区長さんだったんですよ。部落常会してから、仕方がないから降りることにしたんですよ。うちなんかは、たんばら一、おながぐあーだいたい、15軒くらいはその場から連れられたわけ。部落民は翌日。うちなんかは前の日だったから、その夜の洪水は関係なかったけど、次の日部落民は洪水で水に浸かって樋（ピー）から渡ったというんだが、うちなんかはそれはわからないわけですよ。

（島田）最初に行った組はだれだったのですか？

めーあちぐあー、たんばら一、おながぐあー、ひでやす、はたんばらぐあー？ たんにん、だいたい、14、5名。そのくらいしか覚えていない。

最後はみんな、ななちぐちに集まりました。

—— 戦後はずっと奥にいらしたのですね。お元気だから昭和12年生かと思いました。今日は貴重な証言ほんとうにありがとうございました。

5. 祖母が奥ではじめての捕虜に—警防団と日本兵の与論島脱出—

宮城安輝（昭和3年12月20日生）

うちらは学校時代、球（たま）部隊の兵隊壕を掘ったんです。生徒も一般の人もみんな協力して。ひとつは上に、ひとつは海端の方に、二カ所。（敵の）船が来るという想定で。

そのほかに、監視所を作って、見張り番をしていたんですよ。あの頃は何も怖くなかったですね。

すいの避難小と言って、浦添付近から、10・10空襲後に避難する人たちを受け入れるために、各班ごとにウエーデー式で避難後や作って、その人たちが来たらすぐにここに入ってもらうという態勢で奥部落はウエーデーして、すいという所に作ったんです。

民間で頼りのある人たちとか、民間で入りたい人たちは、あちこちの家に配分して、そんな方法で避難民を歓迎しました。

昭和19年頃に、警防団を組織しました。あの時はうちらが一番若かったんですよ。本部はうんやーぐあーというところに一カ所。支部の方はくしんとうぐあーというところに若い者をおいて、先輩たちは本部の方に。

お正月、1月1日、新正月の式典を学校であげてから帰るときに空襲警報がかかったんですよ。そしたら、上原なおぞうというおじいさんが、山に一人だけ登って行ってたのを（監視所）から見たのを覚えています（笑）。

警防団を組織してあちこちを監視していたから、いろんなものを見ていました。

2月頃、本部を山の方に引越したんです。いつでも部落が見えて監視できるところに。そこ

に長らくおって、次にアンガーというところに、今のしゅうすけさんの茶園の下に移しました。自分たちで小屋も作って、ウフドウと言って、今の琉大山荘の向こうの道にタンクがありますよ、そこは監視所だったんですよ。

ある時、船が遭難したんですよ。乗組員は5人で、けがをしていたので、民家に連れてきて養生してもらって元気になったから帰したんです。兵隊さんが来て、遭難している船から荷物を岩穴に突っ込みました。うちら警防団も手伝いました。そこに（アメリカ兵が）食べた後のカラあったんです。アメリカーたちは下からずっと山道を琉大山荘のところまで上がって来ていたんです。

アメリカーが来るのを見て、うちらは監視所から見ていたので裏側から逃げたのですが、玉城つよしげさん、今はもう亡くなっていますが、あの人は、道の上の方に大きな木が倒れていて、その陰になってアメリカーが来るのがわからず、気がついたときは逃げることもできなくなっていて、死ぬんだったら刺し殺してやるといって持っていた短刀を構えたんですが、なんとか助かって戻って来ていました。うちらはとても心配していたのです。戻ってこないから。

石部隊が無線機を持っていたので、石部隊のところに行って、どこに移動するか連絡を取り合っていました。部落民を助けるため警防団と協力して、4から5月頃までだったかな。その後、石部隊がウニシの森の裏側に行った後は連絡がとれなくなりました。それからは警防団だけで部落民を助けようということで、お互いに連絡をとりあって、うちら若い者が、あちこちにいる避難民に連絡して、今日はどこにアメリカーが来そうだから東に移動しようとか、やりました。

幸いにも辺土の牛が奥にやってきたので捕らえて、毎日夜一頭ずつ殺してから、安い値段で売りました。だから食料には困っていませんよ、奥は。自分たち育てた芋もありましたから。警防団は牛を連れてきたりして忙しかったです（笑）。

7月の末頃、日本の敗残兵が入り込んできました。ある敗残兵3人は嘉手納の航空隊ということでした。その人たちが、自分たちを与論島まで船で逃がしてくれ、そこに飛行機があったらまた戦いたいというので、私たち警防団はぜひ協力しようということで、くり船、サバニを出して与論島まで兵隊を届けました。

送っていったおじいさん達が、与論島から酒を買ってきたんですよ。そうしたら、石部隊の兵隊が酒を分けてくれと言って鉄砲を向けたのですが、駄目と言いました。あとから少しはあげたようですが。先輩たちから聞いた話です。

爆弾が落ちたのは何月だったかな。田んぼの真ん中に爆弾が落ちて、その破片が家まで飛んできて牛の背中を直撃したので、牛は暴れて鼻輪を切って逃げて倒れていました。死んでいるんだなと思ったら、まだ暖かいんですよ。

ちょうどその時、うちには70代のおばあさんがいたのですが、そのおばあさんが、歩けなくて山に行けなくて防空壕に隠れているはずだったのですが、道に迷って疲れたので家で休んでいたんです。着物を干して。牛を見に来たら、家に着物が干してあるので、見てみたらおばあさんが寝ているんですね。

「明日になったらアメリカーが来るから一緒に山に逃げよう」といったけど、疲れたから行かない、明日行くというんですね。翌日、アメリカの水陸両用戦車が奥の港から入ってきて、神社の鐘をとっているんですね。その時、奥でアメリカの捕虜になった第一号はうちのおばあさんなんですよ。その船で羽地（の捕虜収容所）に行ったんですよ。翌日家に行ったら着物は干したままだけど本人はいない。

その後、羽地で亡くなったようです。結局会えませんでした。栄養失調か何かで亡くなった

のだと思います。年寄りでしたから。亡くなった後知って、お骨を羽地に取りにいきました。

捕虜第二号が、山の反対側にキャンプしていたしんゆうさんと新城さんという家族です。あの人達から聞いたんですね。「あんたのおばあさん（羽地の収容所に）いるよ」と。

あの人達が、「アメリカは大丈夫だよ、降りてきなさい」と言うんだが、「スパイ」だといってなかなか聞かないんですよ。それで、あとは部落総会でどうするかとなったんですね。そして、「それでは降りよう」ということになり、誰が交渉に行くか？で、上原のなおみさんですね、区長の、そして作業専門の小山先生という方がいらしたんですよ。四国の方が。その方は少しは英語がわかるんですよ。その二人が白旗を持って降りてきて交渉して、そして明日降り始めたんですよ。

その時は大水です。川を渡っている樋（とい）です。命の樋ですよこれ。この樋を一人一人わたったのですよ。命綱みたいな格好で渡ったのですよ。そんな苦勞をして。その翌日は（皮肉にも）晴れておったんですがね。

うちのおやじはたま部隊にいたんですよ。おやじが帰ってきて一緒に山手の猪垣のところに行った時に、向こうから無線機を持ったアメリカが5・6名来て、うちのおやじをすぐに引っ張って行ったんですよ。今のお宮のところにアメリカの本部があったけど、そこに連れて行かれた。それから、おやじとアメリカが家に一緒に帰ってきて、「うちの家族はこれだけですよ」という感じで紹介したら、缶詰とかパンとかお菓子を持たせたんですよ。

うちのおじいさんとおばあさんは足が悪かったのでアメリカの車、GMCに乗せられたんですね。一緒だと思っていたら、あの二人は羽地で降ろされて、こちらは大宜味の饒波の方に連れて行かれて別々になったんですね。それで、その後しょっちゅう連絡とりあいながら奥に帰ってきたんですね。

帰ってきたらもう、奥は草ぼうぼうでもう、ほんと足の踏み場もなかったですよ。牛が死んでいるところもあるし、山の方も草が生えているし、ほんとうにたいへんだったですよ。

（島田）あの牛はどうなった？

腐って、そのままですよ。爆弾でそうとうやられましたからね、山には半年くらい居ったと思うんですよ。山暮らしがね。

たかばてという尖った山に監視所があったわけ、二カ所に。監視に行かない人たちは家族を回って連絡とりあってから、何日何時頃、全部一緒に山を降りなさいということで連絡をとりあっていたんです。

たかばてで、一人の子どもが監視所に走ってくるのをアメリカに発見されて、子どもが殺されよったですよ。その前の日に日本の兵隊がアメリカにケガさせられて。そういうことがたかばてから良く見えるんですよ。日本兵が担がれていくのを見たんですよ。

日本の兵隊が木炭を作らせて、それをたくさん山に置いてあったのをリヤカーで取りにいったことがあります。3名で、きゅうせいというのときゅうだかとうちと3名。「今日はアメリカいないからゆっくり取ってこような」と言って、山手の方に。そしたら二人のアメリカと鉢合わせして。こちらはチャーハイして逃げてですね。一人の青年が土手に頭突っ込んで隠れたんですね。「頭隠して尻隠さず」ですよ（笑）。アメリカが恐いっていつてね。

その頃、日本兵は学校のところで塩炊きをして居ったんだが、二人のアメリカが通るのを扉に座って見ておっいたらしい。そうした、翌日アメリカの攻撃があった。日本兵がいるということが分かったから。8名の日本兵が来るのを墓のところで待ち伏せして、あとからゆっくり

来た兵隊もみんなやられたんですよ。

その時、警防団長のしんいちさんという方の子どもが亡くなりました奥は小さな子どもはお墓に入れずに別に小さなお墓をつくるんですよ、うちら、そのお墓をつくる準備をしに二人で行ったんですよ。しんてつ、宮城しんてつと二人。そしたら、どこからか「うーん、うーん」という声が聞こえてきたんですよ。「おかしいなどこからだろう」と思って探して川の中を見ると、兵隊が頭だけだしてうなっているんですね。「これはたいへんだ」ということで日本の兵隊の所へ連絡して兵隊を連れてきました。持ち上げたら、もう周りは血の海ですよ。その後死んだのか分からないけど、その後、奥の人たちが死んだ人を一カ所に集めて葬ったんですよ。

学校のところで殺されたのは、そこは草が生えていますからなかなか分からないんですよ。3日くらいしたら（死体が）膨れてから草の中から出てくるんですよ。3名くらい。それも一緒に葬ったんですがね。たいへんだったですよ。だから、これから考えたら、戦（いくさ）というものはね、話もしたくないと思うんですよ。戦はやるもんじゃないですよ、本当に。

あの頃はわたしら17～19くらいですからね、兵隊に行かなければ何か弱体みたいな感じで、志願してでも行きたかったですよ。私はルイレキ（瘰癧）（※頸部(けいぶ)リンパ節結核の古称。少・青年に多い疾患であったが、最近ではまれ。結核菌が顎下部・側頸部・鎖骨上窩などのリンパ節に侵入し結節を形成。次第に乾酪化、化膿して瘻孔(ろうこう)を作る。[大辞林])を罹って長いこと煩っていたものですから、(徴兵)検査の時に、「あんたは後回しだ」ということで帰されて、それで命拾いましたんですよ。

(山から)降りるときは命拾いだなあと思ったですよ。降りてきたらアメリカ人は優しくてね。もう、おとなしくて優しくて。降りる前にチラシなどは見たんですが、本当はどうされるかわからんと思っていたんですよ。また、アメリカ人は夜は目が見えないと思っていましたしね。

それから、カンネンポーの食料で避難民もみんな助かっているんですよ。乾燥ジャガイモで。兵隊はあんなの食べていないですよ、あんなのは。すぐ側にアメリカが駐屯しているんですよ。カンネンポウを突っ切っていくときに、ガラガラと音を立てても、アメリカ人はアメリカは何もしなかったですよ。民間人だということを知っているから、見ないふりして。だから避難民もみんな助かっているんですよ。あんな大きな船にいっぱい食料があったから何度も取りに行ったけど。

—— やんばるに避難した中南部の人たちは食料がなくて困ってたとよく聞きますが。

奥はたどうし芋というのが残っていたし、びーな一葉という葉っぱもいっぱいありましたからね。こんなので助かっているんですよ。

—— 奥に避難した人たちは食料には困らなかったのですか？

「困ってないと思いますよ。芋もあるし。だから、兵隊が入ってきてからですよ。芋も取ってから。だから日本の兵隊も悪いなあと思ったですね。

—— 兵隊が来てから根こそぎ取っていったということですか？

はい。

これは戦前、伊江島に徴用された頃の話です。崖の下の海に湧き水があり、そこへ桶を二人で担いで水くみに行くのですが、日本の兵隊が入ってきてわざと洗濯して泡をはかせて、洗濯場にしているんですよ。潮が引いたときにだけ水が汲めるんですが、ほんとうに日本の兵隊は

悪魔だなあと思いました。今でも懐かしいですよ。伊江島に行くときは。

—— 伊江島にはどれくらいいたのですか？

伊江島には、青年の頃に二回行って、それから徴用で二回行って、だから4～5回くらい行ったんじゃないかな、伊江島には。

奥の区長の上原なおみさんと宮城しんえいさんという部落の大先輩が、豚をつぶして噌炊きして味つけて、醤油樽の二つに詰めて、伊江島の現場まで慰問に来ていたんですよ。ほんとうに奥はありがたいなあと思いました。らばすと言ってはなしろたまきちが、その人たちを連れて現場を回ってきたんですよ。現場で休憩して食べたんだが、余ったのは持ち帰って。ほんとうにありがたいなあと。別の国頭の人からは羨ましかったんじゃないかなと思うんですよ。

6. 避難小屋での出産とハブ咬傷

翁長林広（昭和11年11月12日生）

小さいときの話なのであまり詳しくはないのですが、10・10空襲があったのは2年生の時です。その後10月の下旬から山に入りました。10・10空襲の時は、日本軍の演習だと思って手を振ったらパラパラとやられて、それから怖がってみんな山にあがったのです。

—— 家族で山に行ったのですか？家族は何人ですか？

家族で山に行きました。家族は、おやじは兵隊に行って、死んだのを知ったのは後ですが、母と僕、妹、弟、山にあがる当時は4名です。山の中で妹が生まれたんですよ。昭和20年の1月頃。その上に18年生まれの子がいたけど、その子があまり泣くものだから、みんなの所で生活できない。鳴き声を聞いて敵の飛行機がやってくると言われて、翁長家一件だけ離れて避難していたんです。

（島田）翁長さん、いそまんぐあのもりすう、いそまんぐあのだんめー（お母さんのお父さん）が親族みんなを守るために、「なべ（翁長さんのお母さん）よ、この子どもはあまり泣くから殺そうじゃないか」と言ったという話は本当ですか？

はい。本当です。

1月頃妹が生まれたんですがね、山の中で。私のお母さんのお母さんも私たちの家族と一緒に住んでいました。みんなとは離れて。

妹が生まれてまだ何ヶ月もならないのに、ハブに咬まれたんですよ、母親が。僕はどうしていいのかわからなかった。赤ちゃんも見ないといけないし、弟の面倒もみないといけなし、弟はまだ歩けなかったんですよ、2歳になるけど。終戦後辺土名で捕虜になってからは歩いたんだけどその子は。

ハブに咬まれたらどうすればよいのかと書いていたら、母が、（咬まれたところを）「切ってくれ」と言うんですね。腫れていたんですよ。そこを切らないと死ぬというものだから、包丁を研いで切ろうとしたけど切れないんです、堅くて、パンパンに腫れていて。どうしたかと言えば、以前に、座礁した船から持ってきた缶詰を開けようとして手を切って血が出たことを思い出したんです。同じように、ブリキの缶詰の缶の蓋で母親の腫れた傷口を刺したら血が出たんです。自分で考えてやりました。

それは、4月頃だったと思います。長雨だったのでナメクジがたくさんいました。それをバケツ一杯持ってきて、お母さんの傷口に10匹くらい這わせて、血を吸わせました。10分くらいすると、血を吸ったナメクジが黒くなって落ちるんですね。そしたらまた山からナメクジを捕ってきて、2～3日それを続けました。そうしているうちに腫れもひいてきて、もう大丈夫かなあと思ったのです。自分の考えですけど。

その時は、うちの母の母親も別のところに避難していたのですが、そのおばあさんの所に行って「お母さんがハブに咬まれたけど、どうしたらいいか」と相談したら、うちの所にやって来て、「みんなに連絡しなさい」といいました。うにしめ一の裏側のナナチグスという所に奥の人みんなが避難していたんですが、そこに行きました。小さな子があんな険しい山をよくも探して行けたなあと思えると不思議です。

そこには、上原はっちという、医者みたいな人がいたんです。その人に事情を話したら、来てくれました。血清は持っていたのだけれど、一週間も経っていたら効かないと言われ、塗り薬だけを塗ってもらいました。「腫れがひいているから大丈夫だから」と言われました。

あんな山から山へ小さい子が行けたのは本当に不思議です。今行けと言われてもできない。そういう状況で、母親も6月頃には、どうにか歩けるようになりました。

それで、みんなの所に行ったのですが、結局、小さい子が泣くと飛行機がやってくるからと言われ、また、みんなから離れて避難していました。

そうしているうちに、アメリカ兵が川にやってくるようになりました。ある時、一本松の上からアメリカ人の行動を見ていたのですが、別のアメリカ兵が上の方からやって来て見つかりました。ぼくがしゃべらなかつたら見つからなかつたかもしれませんが、見つかって、鉄砲を向けられて、降りろと言われて、「一人か？」などと言っているようでした。

それから、家族のいるところに案内させられました。そしたら、いいアメリカさんだったんですね。大雨だったんですが、二人の子どもをおんぶして、今の駐在所の所まで連れてこられました。そこには一番組の風呂場がありましたが、そこにはアメリカの缶詰がどっさりあるんですね。それをあげようとするんだけど、恐くて食べなかつたら、アメリカ人は自分で開けて食べて見せて、「大丈夫だよ」という感じで。それで、美味しくたくさん食べたんです。

うちの母の傷口を見て、衛生兵を連れてきて、白いメリケン粉を練ったような薬を塗ってくれました。そうしたら2・3日の内にその傷もみんな治ってしまいました。「いい時に捕まったなあ」と喜んでいました。一番最初に捕まったのが内の家族です、今のお宮の向こうの空き家に避難して、炊事場に畳を持ってきてそこに寝ろと言われました。一週間くらいだったかなあ翁長家だけだったのは。

その後、タンパーのひでやすさんたちが二回目に捕まっているわけ。それまで一週間はアメリカに番されて、水も井戸から飲むと言われて水管ふたつくらい置いていって、これから飲むんだよといって。食べ物も缶詰をアメリカさんが持ってきたので、その時は食べ物には不自由しなかつた。

二回目の捕虜が来たから、ジープ（ダージデータ）に乗せられて大宜味村の饒波の公民館に入れられました。あっちで、6軒か7軒一緒にしばらく生活しました。その後、アメリカが田んぼの中に小屋を造って、そこに移りました。そこでは、田んぼにはフーチバーがあるし、塩は海の水をアメリカ人のチェックを受けて汲んで来ました。いちいち厳しくチェックされました。そうやってどうにかやっていました。

辺土名におじいさんがいたんですが、そのおじいさんが8月頃、夜中の12時過ぎに憲兵がいなくなった時にやって来て、「こんなところで生活できない」と言って、荷物も子どももみ

んな背負って、辺土名まで逃げました。辺土名には奥の人たちみんながいるので、ようやく一緒に暮らすことができ気持ちよかったです。一件だけでは不安でしたから。

信さんのおやじさん、なおみさんが区長で、色々やってもらいました。

(島田) 翁長さんが山道を一人であるいたでしょう。それを記録に残しましょう。とっても貴重な話ですよ。翁長さんの話は、小学校2年生ですよ。

牛の話もしてもらえますか？

牛の話は恐いですよ(笑)。おやじが戦争に行ったので僕が牛の世話をしていたんです。牛に乗って川の所に草を食べに連れていったりして、大事に育てていました。戦争中も山に避難していた時も、山から草を刈って毎日草と水をやり家に帰ってました。ある日、いつものように草を水をやりに来たら、日本の兵隊が5名くらい来て、家の庭で牛を殺してるんです。奥でも立派で大きくて優秀な牛だったんです。まさおさんのウンブラのおじい「あんたの牛は村に持って行っても優秀だから大事に育てなさい」と言っていました。それで僕が怒って泣いて兵隊にかかっていいたら、兵隊が包丁を振りかざして「殺すぞ」と言ったんです。牛だけは大事に育てていたのに。僕は殺されたくないで泣きながら帰りました。そんなこともありました。

アメリカさんより日本の兵隊の方が恐かったですね。今いろいろと新聞にも書かれているけど。

—— これはいつ頃の話ですか？アメリカが辺土に来る前？来てから？

アメリカが来ている時です。5時になったら帰って行ったから。水陸両用戦車で来て夕方に帰って行ったから、その後牛に草と水をやりに来たんです。それなのに、日本兵に牛を殺されて、私も「殺す」と言われて泣いて山に帰って、たいへんだったですよ。

—— 牛を飼っていたのは翁長さんのところだけですか？

(島田) いや、ほかにも飼っていましたが、自分で殺したり兵隊に殺されたりという例がほかにもあります。

山の中で妹が生まれた時はトイレの中に落ちていました。その時頭を打って病気になるって、二十歳の時に病気がひどくなって亡くなりました。おばあがトイレの中から上げて洗って。名前はよしえでした。

もう一人の妹ははること言って、三年生の時に破傷風で亡くなりました。熱がでてから一日で亡くなって。りんじゅんの下。

(島田) よく泣いたというのはりんじゅん？

よく泣くのは、くに一とりんじゅんと、せいけんと。

(島田) あの頃は、飛行機に聴診器が付いていて、泣いたら飛行機が来ると思われていた。この三人は殺される候補者だったわけだ(笑)。

翁長さんののは本当に貴重な話ですよ。ほんとうにありがとうございました。

聞き手：島田隆久 宮城能彦

2010年6月20日 10:06～11:40 奥民俗資料館にて

7. 長崎海軍大村航空隊飛行機工場

崎原栄唱（大正14年11月1日生）

高等2年を卒業した15歳からそれから17歳まで、奥で土木作業の仕事をして家族の生活の糧にしていました。しばらくして軍に徴用されて昭和17年の8月27日に長崎の大村に行きました。写真はその時のものです。そこに行ったばかりの時の最初の写真です。沖縄、宮崎、熊本の方がいますが、ほとんど沖縄の方です。

そこで、3ヶ月の訓練、軍隊で教練をしてからそれから、工場でハンマーの打ち方を一ヶ月、ヤスリの使い方を一ヶ月、それからササキといって飛行機の部品の重なるところのすり合わせの訓練、そしていよいよ各工場の部品の修理工場で各班に配置されました。

それからしばらくして昭和18年の8月から3ヶ月名古屋の方に出張したこともあります。約3年。昭和19年の8月に満2か年になりました。

それから、また大村工場に10月の20日に帰りました。少し休みをもらって23日に工場に出勤したら、これがもう大変だったんですよ、大空襲。B29が70機と言われてます。500キロ爆弾落とされて工場は全滅。6万か7万の工員さんがいました。飛行機部と発動部、そして総務部、私たちは発動部でした。

500キロ爆弾を雨のように落とされてほんとうに大変でした。挺身隊の女性も、希望して稼ぎに来ている婦人もいました。何千坪という会社の敷地は、地震のように揺れて、男性も女性もみんな伏せてたのですが、命を失った人もたくさんいます。私たちも凄いで凄いでなんとか生きましたが、コンクリートで作られた防空壕の人も壁が落ちて埋められて亡くなった人もいます。空襲が解除になった後、亡くなった人が一カ所に集められていました。

その後、もう工場では仕事ができないということで、諫早の公園に焼けた工場から持ってきた破けたトタンを持ってきてそれで仕事をせよと言われたのですが、できるわけないです。機械もないし、部品も、ハンドルもないし。

私たちはその後鹿屋航空隊に行き、そこで会社に通いました。そこには私たちの隊長だった豊田豊隊長が工場長になっていました。それにの先生がたくさんいらっしゃたのでとても心強かったです。とても可愛がってもらい、自分の兄さんのように慕いました。

宮崎の青年と仲がよかったので、二人で下宿を借りて一緒に生活しようということになり、あちこち探しました。当時私は20歳でした。

ある家をお願いに言ったら、「工員さんちょっと待っていてくださいね」とその家の奥さんに言われ、旦那さんの食事でも作っているんだろうと思って待っていました。当時は食堂に行くと食べるものはなく、桜島に行って名物のミカンを買ったら、その皮まで食べていた頃です。なのに、その奥さんは「はいどうぞ」と言って、お膳に二人分の食事を持ってきてくれたのです。今でもその恩は忘れません。鹿児島島の芋ご飯でしたが、とっても美味しかったです。食べ終わった後に、奥さんは、「二人を下宿させてあげたいのだけれど、この家は駅長の家でたくさんのお客さんが見えるので下宿はできないのです。ほかの家を探してくださいね」と言うのです。食料や物が無い頃に、芋ご飯をくださった、その奥さんの親切は今でも絶対に忘れないです。ほんとうに嬉しかったです。

芋ご飯というのは、ご飯に芋を混ぜたものですが、とっても美味しかったです。腹一杯食べ

て「ごちそうさまあ」と言いました。そのことは決して忘れないです。

それから、お父さんやお母さんの顔が見たくなくて豊田隊長に願ひ出たら、「よし、頑張ってください」と行って一週間の旅行証明をもらいました。

ところが、船に乗るとすぐに、鹿児島湾の中なのに、「情報がない」「情報が悪い」「情報次第」ということで一週間が経ってしまいました。ようやく12月の7日に12隻の船団でいよいよ沖縄へ出発しました。弾薬とか食料とかを積んでいる船団でした。7日に鹿児島を出て一週間で那覇港に着きました。たいしん丸という600トンから700トンの船でした。紡績から帰る女性たちも一緒でした。

大島のひととなかに入った時に大きな爆音が聞こえて、船がやられたと思って船底の方からたくさんの人が上がってきました。そしたら船長さんが降りてきて、「今の爆音は、敵の潜水艦に発見されないように友軍が爆発させた爆雷というものです。安全ですから、静かにしてください」と説明しました。その後、何もなくて那覇港に着きました。

那覇港に着いたら、桟橋はみんな焼けていて、黒砂糖や色んな物が溶けてアスファルトのようになっていたんです。沖縄の10・10空襲については、私は名古屋の航空会社の工場で残業している時に、夜中の食事時間に臨時ニュースが入ってきて、「沖縄は10月10日の空襲で3日間にわたって燃え続けました」ということでした。びっくりして、沖縄は全部やられたのだと思っていました。

実際に沖縄に来てみると、那覇の街は焼け、桟橋も倉庫も焼かれて何もありません。びっくりしました。船から下りて少し歩いていたら、男の人に「どこから来たの？」って聞かれたので、「長崎から鹿児島に行ってそこから600～700トンのたいしん丸という船で来ました」と答えたら、「たいしん丸は、かりゆし船だから良かったねえ」と言われました。

お父さんお母さんに会って、一週間から10日後に那覇港に来たら、もう船がないんですね。一緒に来た貨物船は敵の飛行機に全部やられてしまって。那覇の港の船も沖の船も。

翁長という奥の親戚のおじさんが那覇にいて、そこに泊めてもらっていたのですが、そこに荷物を預けて、とりあえずお父さんお母さんに会ってこようと思ったら、その時また空襲がありました。午後の3時4時頃です。その時は庭の掃除をしていたのですが、おじさんに、「私のお母さんを山原に連れていきなさい。車はないから歩いていきなさい。」と言われ、そのとおりに、空襲がおさまった頃に一緒に歩いていきました。冬なので夕方出発した7時頃には暗闇です。3合のお米だけを持って二人で生きました。

恩納村の多幸山に着いた頃は朝の5時。家の明かりが見えたので行ってみると、2・3歳くらいの子とお母さんがいました。「3合のお米を炊きたいので台所を貸してください」というと貸してくれました。その家のお父さんは防衛隊に行っているということでした。

ご飯が炊けるまで、とても疲れていたもので、ぐうぐう寝てました。おにぎりにして食べて、残りは宿を借りたお礼に差し上げました。

朝の6時に出発して名護に着いたのは9時半から10時頃でした。そこから、奥にいる兵隊や民間に食料を届ける車があったので、それに乗せてもらい奥まで来ました。

私は一週間だけの旅行許可だけで来ているので、船が無いとはいえ帰らないと軍法会議にかけられるのではないかとずっとヒヤヒヤしていました。なので、改めて入隊しようと思い、那覇に着いたばかりのころに軍司令部を探しに行きました。軍司令部は第二高等女学校のところにありました。そこに行くために壺屋の芋畑、あの頃はあの辺りは畑でしたから、その辺りで軍司令部を探していると、奥のうんぷら一のとし子ねえさんに会いました。「軍司令部なら芋畑の向こう、姫百合通りのところにあるよ」と教えてもらい、軍司令部に行きました。

そこで「私は長崎の飛行機工場から来たのですが、沖縄に来て船もなく内地に帰れない状態なので、ぜひ沖縄で入隊させてください」とお願いしたのですが、「帰れ！お前は入隊できない。帰れ！」と言われました。

一度は帰りましたが、自分の友達もその弟たちもみんな軍隊に行っているのに自分だけ行かないわけにはと思って、もう一度入隊をお願いしに行ったのですが、「お前はまた来たのか。だめだお前は入隊できない」とまた帰されました。私は結局3回お願いしに行きました。でも「また来たのか、帰りなさい」とものすごく大きな声で怒鳴られました。これでは殴られて殺されてしまうと思い、殺されるくらいならと諦めて帰りました。それで私は（後から思えば）運良く兵隊にも行かずに生き延びられたのです。

私の入隊予定場所は、愛媛県の航空隊だったんですよ。しかもその入隊予定日が昭和20年の8月15日。そう、終戦記念日の12時集合だったんですよ。内地で入隊するよりは沖縄でと思って3回もお願いしにいったけど帰されたので、これではいかんと思って、私は奥に帰ってから警防団に入隊しました。そこで頑張って先輩達にも可愛がられました。お前は内地にも行っていたから上等だと言われて。みんな兵隊に行っていたので私が青年のなかでは一番先輩になっていました。

いろんなことがありました。ある軍曹が遺骨を抱いて奥の警防団に来ていました。重機関銃をもっていました。その人は船舶で南方に行く途中に空襲で船がやられて、部下の朝鮮人兵士が亡くなったので、その遺骨を葬ってほしいということでした。それで、鉄できちんと地ならして遺骨を埋葬しました。

軍曹さんはどこかで見たことがあるような人だったので、「辺土名の宇根旅館に泊っていませんか？声でわかります。」と聞いたら、「よくわかったな」とほめられました。敵と戦うために我々は重機関銃を担いで来たというので、適切だと思われる場所に案内したのですが、「そこでは駄目だ。川の向こうがいい」と行って降りていった時に石部隊と合流しました。そういうこともありました。

本部の宇戸部隊の敗残兵がやってきたことがありました。その兵隊達がうやち（ウスミチ？）浜のアダンの陰で休んでいた時です。偵察機がブンブンとやってきて、見張り役の初年兵は上空だけを見ていたので、海からアメリカの水陸両用戦車がやって来るのに気が付きませんでした。日本兵はまさか海から戦車がやって来るとは思わなかったんでしょうね。アメリカに見つかって、爆弾を打たれて、みんな逃げたのですが、一人だけやられました。戦死した兵隊はそのまま浜にほったらかしにされていました。後で行ったら、死体は流されていました。

これは、娘にもしたことがない話です。午後の4時半か5時頃にはアメリカ兵は必ず辺土の部隊に帰りました。私たちはアメリカさんが来るのも帰るのもいつも監視していました。その日、私は畑の監視に行ったら本部から来た敗残兵が芋掘りをしていました。敗残兵が芋をとるのはいいのですが、いつも畑を荒らして困ってました。

突然、私の隣家ののおばあさんが、「兄さん、兄さん、にいさん、助けて」と叫ぶのです。おばあさんは敗残兵に、のど元に短剣を突きつけられていました。

「兵隊さん、ちょっと待って、待って」と私は大声でさげびました。「ちょっと待ってください、おばあさんが何か言ったんですか？」と聞くと、「芋をとるな」と言われたというのです。おばあさんにも聞いてみると、「私は、芋をとるのはいいけど、カズラの根っこはちゃんと土に埋めてもどしてくださいと言ったただけ」というのです。兵隊はうちな一ぐち（沖縄口）、しかも奥ムニイ（奥方言）がわかるはずがないから通じなかったんですね。標準語はわからないから沖縄の人は。

「兵隊さん、芋を取ったらカズラの根っこはちゃんと埋めてください。戦争はいつまで続くのかわからないから、新しく芋ができるようにしないとということですよ。」と説明したら「わかった。青年」と言って、首に突きつけていた短刀を離しました。この話は、今初めてします。その後、「あんたがいなかったら私死んでいたね」とおばあさんに言われました。兵隊は一等兵だったと思いますが、「わかった。わかった」と言いながらさっていきました。この辺りでは、あっちで3にん、こっちで5人、十何名も日本の兵隊がやられていますから。

そのことを思うと、戦争は絶対してはいけないと思いますね。今、基地反対といっている人たちも同じ思いなのでしょうね。私は兵隊にも行かなかったけど、私と同年は沖縄戦で一人も生き残っていないんです。みんな亡くなっています。今同年生が3人いますが、内地に行っていたり、台湾に行っていたりで、沖縄戦に参加した人は絶対に生きていないです。

長崎の工場で撮ったこの写真に写っている沖縄の人たちは、みんな小禄航空部隊、そこは長崎大村の海軍航空隊の零戦工場の配下でありましたから、そこに行つて、みんな死んでいるんです。私が名古屋に行っている時に、もし私が名古屋に配置されていなければ私も死んでいたんです。三百何十名の方が九州の宮崎や熊本などから沖縄に来ていたのですが、わずかに二名だけが生き残りました。熊本の方、その方は戦後何度か沖縄に来て会っています。もう一人は石川の人、その二人だけです。

6月13日は、小禄の海軍が玉砕した日です。小禄の海軍壕に参拝します。お知らせが今でも来ます。もう年を取ってなかなか行けないのですが、もし名古屋に行かなければ私も小禄で死んでいました。みんなで仲良く暮らしていたのに。私と（写真を指さして）この人とだけが生き残りました。その人ももう病気で亡くなっています。

こんなこともありました。ウスミチ海岸でアメリカさんがパンツだけで平たい石の上でう寝転んでいたことがあります。船でやられてから泳いで来たんでしょうね。真夏だから安心して寝ていたんでしょう。その時はまだ戦争中ですから、助けようという発想はなかったです。そのまま死んで遺体は台風で流されていました。もし日本人だったら葬ったんでしょう。

2月頃でしたかね。あるお母さんが、「兵隊さんが海岸に上がっているよー」とザルもほつたらかして警防団に駆け込んできました。みると、兵隊さんの首がなかったです。死ぬと最初に首が落ちるそうです。ゲートルもズボンもそのままでしたから、石部隊の兵隊さんが何か身元がわかるものないかとポケットを探したら、その人は宮崎の出身で、お母さんか奥さんの写真、たぶんお母さんだと思うのですが、その写真だけがありました。その写真は石部隊の兵隊さんが持って行きましたが、その時、私が持つておけば、後で遺骨を遺族に返すこともできたのではないかと、とても残念です。石部隊の兵隊からその人の家族に写真が届いたのかわかりません。

戦争の最初の頃は石部隊が無線機を持っていたので、4月頃には読谷にアメリカ軍が上陸したことなどの連絡を受けていました。辺土名までアメリカさんが戦車でやってきているので、あと何日かでここまでやってくるという情報が入ったので、石部隊の兵隊さん達は移動してきました。だから、最初の頃は無線で情報が入っていたんです。

8. 護郷隊で恩納岳へ

宮城長栄（昭和3年8月20日生）

奥で学校を卒業して昭和18年の3月の20日か23日に伊江島に一ヶ月の奉仕作業に行きました。その後すぐ赤紙を渡されて、護郷隊に二次招集で入隊したのです。護郷隊の一次招集

は信夫さんたち。自分たちは一期遅れて、名護岳で二次招集でした。日にちは覚えてないですが、朝5時頃起きて、親も誰もいなくて、区長さんだけの見送りでした。乗り物もないし、歩いて安富祖の小学校に行ったらすぐに教育訓練でした。

その後、恩納岳に全部集められました。そのうち艦砲射撃や機関銃が激しくなり、金武方面には戦車砲とか武器が設置されていて恩納岳にバンナイ打ち込んでいるのが見えました。それで戦死者も多くでていました。そんな中なんとか生き延びていました。

何か月くらい軍隊生活が続いたかわかりません。戦争に負けて部隊は解散したのですが、その前にあちらこちらに移動した部隊が恩納岳に集まった感じでした。我々護郷隊はいろんな作戦をやったがどうにもならんから、参謀達も解散しようと思ったんでしょうな。名嘉眞岳、久志岳を目標にして、やっと山の穴に着いてそこで解散しました。持っている武器を一カ所に集めて、隊長命令で、「一応解散するものの、いつかまた命令するから帰って来なさい」ということでした。

熱田の山の中で解散したのでシマに帰えろうと思いました。大湿帯を通過して白浜から排水溝をくぐって塩屋湾に入り、泳いで塩屋湾を渡ろうとしたら、もう照明弾がバンナイ、たくさん上がって我々を狙っているんです。泳いだり、途中息が続く限り潜ったり、それを繰り返して、なんとか塩屋湾を渡って山の中に入りました。

そこから国頭に向かっている途中、山に非難している人たちの山小屋を訪ねました。そこで、奥の人たちはみんな辺土名や大宜味方面に避難していることを教えてもらって、辺土名まで送ってもらい、自分の家族に会うことができたんですよ。

恩納岳から東の山の中の解散場所まで何日かかったか覚えていません。信夫さんも一緒でしたが信夫さんは一次招集でしたから先に帰っているのです。4日くらいかかったかもしれません。食料もなくて、昼は砲撃だし、夜の移動で何百名という部隊がよくもみんな移動できたか不思議です。

—— 何を食べたか覚えていますか？

みかんの缶詰は覚えています。

—— 辺土名についたのは何月か覚えていますか？

9月だったかな？

—— 戦争が終わっていることは知りませんでしたか？

いや、わからなかった。手の打ちようがなかった。そうとうな戦死者もでていました。死傷者は4、5名で担いでこられてました。空襲はなかったです。迫撃砲とか戦車砲とかは思いっきり撃たれましたが。

帰って来たら家族はみんな無事でした。

伊江島は、最初は辛くはなかったですよ。最初に行ったときは芋が籠にいっぱいあって食べました。でも2回の時は食料が不足してたいへんでした。

伊江島では飛行場作りでした。嘉手納や読谷の徴用はみんな飛行場作りでした。三つ又と鉾とツルハシはあったけどスコップはあったかな。モッコに入れて二人で担いでいました。機械があったのはトロッコ。あれで運搬しました。

寝るところはちゃんとありました。人家で寝ていました。

(島田) 伊江島には2回いったんですね。

はい。3回だったかね。当時はただおと私と、みんつ一、いさむ。

9. 伊丹防空特殊航空会社で旋盤工

崎原キヌ (大正15年7月14日生)

大正15年生まれなので、小学校の同級生に大正生まれと昭和生まれがいました(笑)。

—— 今の大学生と同じですね。今は昭和生まれと平成生まれがいます(笑)。

同じですね。奥の小学校高等科を卒業後約1年奥にいました。その後、私たちが連れて行かれた時は、戦争が激しくなる頃でした。私たちの次の船はやられました。奥から宜名真まで歩いて行って、そこから辺土名まで馬車で、辺土名から名護まではトラックだったんじゃないかね。名護だったか恩納だったか、そこから那覇まではバスだったかね。那覇に2~3日泊まって、それから、「海洋丸」だったかね、名前ははっきり覚えていないけど。

半年くらい、いや4ヶ月だけは姫路の姫路紡績でした。私たちは紡績とって連れて行かれたんだけど、その後しかまの軍事工場にしばらくいました。その後、伊丹の防空特殊航空会社というところに行きました。そこで、飛行機とか軍艦の消化器を作りました。旋盤を使って。

男は年寄りとか兵隊に行っていない人しかいないので、私らが若いから知らないけど、名護の人と二人一組で六尺大盤を使いました。こんなに大きな鉄筋を切る機械です。大きな鉄筋を何センチ何センチと切って。たまには小さなバイトで、真ちゅうのねじ切りをやりました。

行ったばかりの頃は寒くもあり辛かったけど、軍のためという気持ちも一杯ありましたから、夜勤の時などは居眠りしながらも頑張りました。居眠りしている間にハンドルの操作を誤ってよくバイトを折ったんです。

このバイトを磨くのがあまり上手ではなくて自分が作るのは切れ味が悪かったんです。それでよく班長に怒られました。自分たちはその時はまだ常識もわからず言葉も荒いから、班長のことを「おじい」と呼んでいました。「おじい、一生懸命やっているつもりなんですけどできないんです」とたまには口答えしました。バイトを折ったせいで切れが悪くて、ねじ切りもうまくいかない時もあるし、検査でやり直しさせられて、これが一番辛くて、泣くこともありました(笑)。

班長さんは四国の方でした。「おじい、おじい」と呼んでいました(笑)。沖縄の人や新潟、秋田の人など、自分たちと同じく卒業してすぐに連れてこられた人がいっぱいいました。

今考えたらおかしいんだけど、あの時は当たり前としか思わなかったのは、いくさの最中だということに、毎日朝礼で、若い人もみんな一時間竹槍とバケツリレー、消化リレーの訓練があったことです。今考えたらおかしいです。

伊丹では青年学校に通っていました。月曜と水曜と金曜は高等科を卒業した人のための「本科」、火、木、土は普通科でした。いくさの最中なのによくそういうことができたなと思います。私たちはそこで読み方、算数、修身、地理歴史を勉強しました。作法もありました。その日は仕事を終えた後、午後二時から四時まで。私たちは本科生だから月・水・金。作法、針、お花も。夜は講堂で、今で言うレクリエーションでしょうね。戦時中だということに。

—— 青年学校はその頃はもう義務化されていますからね。青年学校は楽しかったですか？

楽しかったですよ。月・水・金は仕事も行かないでいいし。みんな集まっておしゃべりもできるしね。趣味のある人たちはそれを伸ばすけど、自分たちはおしゃべりばかりしてました（笑）。あまり学問はしなかったけど、働くばかりで。

私たちは六尺大盤使いましたからね。男がいないから。最初はいたけど半年もしたら男という男は誰もいなくなった。ベルトがはずれたら自分でベルトに上って行ってハメたり。竿がベルトに巻き付いてしまい、工場全体を止めてしまったこともあります。恐くて力が入らないからね。でも二回目からは要領がわかって失敗しませんでした。私はウーマクーだったんだはず。最初から二人でしか持てない大きな鉄筋を切る六尺大盤でしたから。ヤマトのお父さんたちは小さな盤だったのに、沖縄から来た女は皆大盤工でした。名護の人とコンパ、組して六尺大盤工やりました。

ニーブイ、居眠りして、よくパイプを折りました。それを作るのがまた大変だった。

—— 伊丹の特殊航空会社というのはナツさんと同じ所ですか？

いや、こちらは伊丹駅、鴻池のすぐそばだった。ナツさんとはよく会いに行きました。体が弱かったから加古川で一年間入院していたので、日曜日に面会に行っていました。その後妹と一緒に働いてました。あれなんかは新伊丹、こちらは普通の伊丹。

—— 伊丹では空襲はなかったんですか？

ありましたよ。白浜という所に水上飛行機の練習場があったんですよ。そこが上等だということで何もわからず最初そこに避難しました。「あそこは危ない」と言われてきしわだ方面の浜に行きました。水の中でも燃える爆弾があるとは知らずに海に逃げて、油が流れてきて火傷した人もたくさんいました。

夜中に弾に当たって死んだ人を踏んづけるように逃げました。明日帰る時に死体が踏んづけられているのを見て、可哀想だと思いました。ため池に落ちている人もいます。夜は暗くてわからなかったけど、朝になってそれを見てぞっとしました。

工場は燃えませんでした。弾は中庭とか寮などによく落ちたけど、幸いにも不発弾でした。

—— それでは、終戦までずっと同じ所で働いていたのですか？

はい。終戦後の方がよけいにきつかったです。あんなことせんでもいいと思うのですが、出来上がって戦地に送るために箱詰めしているものがあったんですが、それを近くの池に捨てるんです。二晩くらい徹夜でやらされました。敵に見られたら大変だということでしたが、うちらにはよくわからなかった。

作るときは元気よく作ったけど、捨てるときは気が抜けて。

その後は作業もなく、各寮ごとに畑が割り当てられて自給自足で生活していました。その後、何日に引き上げすると言われて、みんな一緒に帰れると思ったらそうではなく、班ごとに割り当てられて、自分たちは最後の方でした。

—— 沖縄は玉砕したと言われてませんでしたか？

言われてました。沖縄に着くと宜名真までは軍のトラックに乗せてもらって、宜名真から歩いて奥にきました。途中まで親族が迎えに来ていました。自分たちの親は年取っているから兄が来ていました。そしたら、朝鮮カマス（※敷物の一種。むしろ）を着けているんです。今でも思い出したら涙がでます。自分たちは敗戦国といってもまだ幸せだった。着物はちゃんと着

けていますから。だけど奥の人は着ける着物もなく朝鮮カマスを羽織っている。こちらは戦地だったんだと思ひ知らされました。

自分たちは配給の乾パンを半分残して持ってきたんですよ。妹、弟たちもいるから。ところが食べ物はこちらの方が贅沢でね。うどうみちに船が座礁したから、そこから食べ物を取ってきているんですね。私が食べずに残して持ってきた乾パンを見たら、みんな笑ってね。自分たちはもっといいもの食べていたんだよと。そういうことだったら、お腹すいたのを我慢せずに食べればよかったと思ひました。あとはみんなで大笑いしました。

奥は食べ物は船が座礁したおかげで贅沢だったみたいです。あんたが帰ってきたお祝いにご馳走走ろうねと言ったけど、たいしたものではないですよ。でもそれを食べようとしても涙がとまらずに食べることはできなかったです。

姉が波之上に迎えに来てくれたことを思い出すと今でも涙がでます。親兄弟がボロギレ着けて、「ああ、こんな生活をしているんだね。敗戦国というのはこんなに惨めなものか」と思ひました。ほんとに惨め。今でも夢にでできますよ。自分たちは上等ではないけどちゃんと着物を着けていたけど、こちらは買うにも買えず、カマスを羽織っている。

—— 奥に帰ってきたのは何年ですか？

終戦後の7月か8月でした。向こうで一年暮らしていましたから昭和21年。その時は奥まではバスがなかったので、宜名真から歩いて行きました。その時には奥の人はみんな辺土名の捕虜収容所から帰ってきてもう落ち着いていました。衣服は無かったけど食べ物は自分で作って贅沢に食べていました。みんな生きるために一生懸命作ったんでしょうね。親兄弟と会ったときは言葉が出ずに、みんな抱き合って泣きました。

向こうにいるときは、畑で芋やかぼちゃやをつくって、食べ物にあまり不自由はしませんでした。なぜか会社に「もろみカス」の配給がよくありました。食べきれないので、日曜日に大阪の親戚の家に行ったら喜ばれました。味噌汁にしておいしいですよと言われました。

今週は天禄の親戚に来週は岡島にとうように持って行きました。ビールのもろみだったんでしょうね。日曜日になると外泊証明というのをもらって、土曜日の晩から日曜日に帰ってきました。外泊するのが楽しみでね。戦後親戚に会うのが。自分でつくったカボチャを残して、もろみと一緒に持って行ったらとても喜びました。向こうでは配給がなかったのかね。だから一生懸命に野菜を作りました。

それにしても、よく生き残ったものです。目の前で弾が当たって即死した人もいたのに。そういう人に手を合わせて「ごめんなさい」とお祈りしてました。だから、二度といくさはやってほしくないですね。みんなのために。

10. 神戸製鋼と北支27連隊

崎原栄秀（大正14年3月10日生）

高等2年まで奥にいて、卒業した昭和14年に軍需工場の神戸製鋼に行きました。奥から那覇まではみんな一緒でしたが神戸製鋼に行ったのは私一人でした。

神戸製鋼の溶解部で鉄板作っていました。200メートルくらいの工場の中で溶解した鉄を釜に置いて運んで鉄板つくる型に流し込みます。その操作、運転をしていました。

—— その操作はかなりむづかしいですか？

電車を運転するくらいの技術ですかね。

その工場には昭和17年までいて、18年に奥に帰ってきた時に徴兵されて北支（北部支那）に行きました。鹿児島で1週間ほど訓練をうけてすぐでした。北支では27連帯に属してました。北京より北の方。20年のお正月は北京でした。

その部隊ではずっとずっと移動でした。

（島田）終戦を迎えたのはどこですか？

終戦はふついでした。毎日毎晩行軍でしたから、どこに行ったかよくわかりません。歩きながらの兵隊でした。民間の方から敵の兵隊が来ているから来てくれと言われて行きました。一日中橋の下で水に浸かっていたこともあります。僕は衛生兵だったから、やられた兵隊を手当しましたが、僕たちがまだ戦地にいる時に、ケガをした兵隊は先に日本に帰ってました。僕たちも早く死ねば、生きていてこんなに苦勞するよりはましだと思っていました。

最初の頃と終戦の時では兵隊は半分もいないくらいになっていました。

—— 引き上げは？

馬と一緒に貨物車に乗せられて、馬の便も一緒に上海まで。上海からアメリカのATCのような大きな船で鹿児島まで行きました。鹿児島では栈橋には着けられなくて、沖の方で二十日も隔離されてました。

鹿児島には半年くらいいました。中城に上陸して昭和23年の8月に奥に着きました。昭和20年に戦争が終わって3年くらい支那に居ったんだけど、支那の兵隊に奴隷みたいに使われて、畑とかやりました。飯をちょっとだけもらって。捕虜生活でした。

食べるのは、おなかの3分の1くらいしかありませんでした。いつもおなかを空かせていました。

—— 戦争の時と捕虜の時ではどちらが辛かったですか？

捕虜の時がきつかった。

—— 支那では沖縄の情報は入りましたか？

鹿児島に来るまで入りませんでした。

（島田）中城から奥まではジープ？

一週間くらい中城にいた後、黒人の運転手がGMCという大きなトラックに僕一人を乗せて宜名真まで送ってくれました。宜名真からは歩いて奥まで。痩せていて坂道を上るのがたいへんでした。

お母さんは生きていましたが、お父さんは戦時中に55歳で亡くなっていました。

—— 戦争の話はあまりやらないですか？

ビデオがあります。僕らのいた部隊が戦後、戦地を訪ねてつくったビデオが。ひろしの弟がもっています。

11. 護郷隊で名護から恩納・石川へ

上原信夫（昭和3年10月10日生）

（島田）先輩は、手記なども色々書いてますから、それは別にまとめたいと思います。

昭和10年に入学、卒業する時は国民学校になっていました。昭和18年。卒業した後は青年学校。青年学校は軍事則を暗記させたり軍事教練が主でした。それから奥で農業をしていました。

終戦後、昭和25・6年に奥を出ました。最初は嘉手納において、食べ物はパンひとつとかミルク一杯とかでした。それから那覇に出て、自分で仕事して32年間は自分で店を出してしゅうごう関係の仕事をしてました。

昭和19年の11月に名護で入隊しました。奥に石部隊の炭焼き部隊が来ていましたが、こちらは木炭釜を作るといって穴ばかり掘っていました。2・3日だけだったかな？石部隊に入っていたのは。それから名護で護郷隊に入隊し教練を受けた後、一時帰郷して2回目に行ったときには戦争になっていました。名護岳の陣地がありましたが、夜中に安富祖に移動させられ、あれから恩納岳、仲間岳、石川岳、楚南とか山城で陣地構築してました。

戦争が激しくなったのは3月の空襲からでした。そのころからこうごうせんびかれーというのがあって、せんびかれー、こうごうせんびからー、へいごうせんびかれーと3つに分かれていて、一番激しく上陸前にでるのがこうごうせんびかれーと言って、その前の段階が空襲とか艦砲とかへいごうせんびかれーと言ってね。こーごーせんびかれーでこちらは具志川の人

—— 人と石川の人とうちと分隊長の4名が楚南に派遣されました。

石部隊の情報部隊が具志川の天願にあったけど、そこから情報を取って石川岳に伝達してそれから恩納岳に伝達してとやっていました。

その後、東恩納の伊波造船に隠れている時には、アメリカは上陸してすぐそばにまで来ていたけれど、うちらには情報がなくわかりませんでした。それからは、アメリカ軍に追われて恩納岳から金武に行って、そこで夜襲、ゲリラ戦をやっていました。金武の製糖工場に来てアメリカの陣地を襲撃して戦死者がでたりとか、そういう風に色々やっていました。いくさというよりも、食料がないからほとんど食料探しでした。

各自出身地に帰って食料を調達してから再び本隊に集まるようにという命令でしたが、それからはもう本隊には戻れませんから、奥に帰ってました。全部手記に書いてます。